



▲春の保原薬師堂。桜の名所としても親しまれている。

先人達がいまに宛てたメッセージが
いきいきと聞こえてきます。

保原には、縄文・弥生・古墳時代の土器や石器・住居跡などが町内のあちこちにあり、古くから人々が住んでいたことがわかります。また、五七世紀と推定される大泉みずほ古墳群跡は、方墳・円墳・前方後円墳が集中する大変珍しい遺跡です。

鎌倉時代初期には、伊達家の始祖・伊達朝宗が源頼朝から伊達郡を拝領し、高子岡城を築きました。小高い丘にあるその城趾から伊達平野が一望できます。

また、現在の陣屋通りの北東には保原城が築かれ、戦国時代には伊達氏の家臣・中島伊勢が、江戸時代には上杉景勝の家臣・大石氏が居城したと伝えられています。城ノ内、鉄炮町などの地名は、城下町の名残りをとどめています。寛保二年（一七四二）には、白河藩（松平氏）の代官所として保原陣屋が設けられ保原地方の一七カ村（約二万石）がこの支配に属しました。このころ、毎月五と一〇の日に町通りに市が立ち、生糸や

真綿が売買され、保原は商人のまちとして大きく発展しました。

また、渡辺新左衛門は、梁川の堀江与五衛門と共に、大変な苦勞の末、慶長十年（一六〇四）砂子堰を築きあげ、保原地方の肥沃な田畑の基礎をつくっています。

盛んだった文化活動

保原町は、文化活動も盛んでした。熊坂霸陵（一七〇八〜一七六四）と息子の台州は、漢学の造詣が深く、民間の学問所「白雲館」を開いています。ここでたくさんの子弟の教育にあたっただけでなく、著作出版活動も盛んに行いました。霸陵が創始した保原の名勝「高子二十境」の漢詩が天明八年（一七八八）に発表されると、大きな反響があり、全国の知識人から「二十境」の漢詩が次々に寄せられました。これらの漢詩は今に伝えられ、二十境の景勝地ともども、保原町のすばらしい文化遺産となっています。

歴史と文化が香るまち